

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 神崎美宙

挿絵 武田弘光



登場人物紹介

Characters



さいじょういん しょうこ 西条院 翔子

ワガママで高飛車なお嬢様。学園の理事長の孫娘にしてバレー部のキャプテン。裕貴より二つ年上の三年生。



さわさき ありす 沢崎 亜理栖

大人しく清楚なお嬢様。水泳部のキャプテンを務める、翔子のクラスメイト。



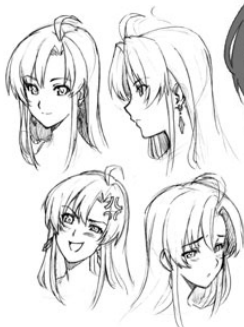
たかはし みさ
高橋 美佐

裕貴の従姉。学園の教師でバレエ部の顧問。おっとりとした母性的な魅力の持ち主。



たかはし ちさと
高橋 千里

美佐と同じく裕貴の従姉。学園水泳部の顧問。明るく陽気でイタズラ好きな美女。



たかはし ひろたか
高橋 裕貴

学園の高等部へ転校してきた少年。小柄で大人しく、恥ずかしがり屋。

序章	
第一章	魅惑の部活体験
第二章	高飛車部長と初体験
第三章	水泳部のスク水勧誘
第四章	お嬢様たちの誘惑
第五章	大興奮の乱ブルマエッチ
終章	

「ダメですわ先生。もっと私たちのエッチな姿を裕貴に見せませんと、ね？」

美佐もしつこく生徒に口を吸われているうちに徐々に抵抗が弱々しくなっていく。そして反対に口淫の激しさは加速していき、美女二人は互いの背中に腕を回して抱き合う。身体と身体の間挟まれた巨乳がぶつかり合い、ぐにやりと形を変えた。

「ちゅぽ、ちゅく……はあはあ、ちゅむ……」

びたりと身体を密着させて舌まで絡ませ始める。翔子は下から持ち上げるようにして美人教師のたつぷりとした双乳を揉みしだく。

「先生のおバスト……とても大きいですわね……」

「ひゃうん！ ダメよ翔子ちゃん……そ、そこは、ああん！」

乳房への責めを受けて喘ぎ声を抑えられなくなった美佐。自然と手は翔子の巨乳を掴んでいた。負けじと剥き出しになっている生乳を揉み回す。

「あ、あふんっ、先生ったら……」

翔子が美佐の汗に濡れた体操着を捲り上げて爆乳を露出させる。白く大きな果実は綺麗な球形で、乳輪もその中央の乳首も大きめだった。かなり量感のあるバストは、大人の女性の妖艶さと母性の二つを兼ね備えている。

（美佐姉えのおっぱい……お、大きすぎる！）

完熟した豊満なバストはため息が出るほどに美しい。ウェーブのかかった金髪が教師の

胸元へと落ちていく。片手で乳房を揉みながら乳首を摘み、もう片方の乳房に吸いついた。「あんっ！ あふうん……き、もちいい……」

快感が高まったためか、普段のおっとりとした性格の美佐からは想像もできない甘ったるい嬌声上がる。必死に反撃しようと翔子の胸を愛撫しているが、力が上手く入らないようだった。

（二人とも、すごいっ……）

激しく絡み合う美女と美少女を見つめていた。再び身体の奥からムクムクと性欲が湧き上がり、股間を痛いほどに膨れ上がらせた。少年は翔子の胸を舐めていた時や美佐に手コキをされていた時に負けないくらい、レズ行為を見せつけられて興奮しているようだった。頃合いを見計らったかのように金髪のお嬢様は女教師の身体をゆっくりと押し倒した。

「しょ、翔子ちゃんっ!？」

仰向けに寝かされた美佐の上に覆いかぶさる少女。器用に脚を動かして美女の両脚を左右に開き、少年の方に股間を見せつける。

「くうん、あふッ、アあ……裕貴あ、私たちのブルマを御覧なさい」

愛液で濡れたクロッチ部分には恥丘がぶつくりと浮かび、女陰のワレメまで浮かび上がっていた。翔子が性器同士を擦り合わせるように腰をゆっくりと前後に振り始める。臍脂色の布地の下で剥き出しになっている女豆が刺激されて、甲高い嬌声と蜜の混ざり合う水

音が更衣室に響く。

「ひゃん、あはン……くひい、み、見ちゃだめえ……」

美佐の恥ずかしそうな声など耳には届かない。少年はじつと美女たちの肉土手を見つめ続けた。お嬢様は裕貴の反応に満足そうに頷くと、頬を赤らめながら口を開いた。

「はふっ……うふふ、さあペニスでたっぷりとブルマを堪能しなさい……」

「えっ!？」

限界まで勃起した童貞ペニスを隠すように、股間に手を当ててモジモジしていた少年に翔子が熱のこもった視線を向ける。

「いい、んですか……?」

言葉では確認をしているが、すでに身体は性欲という本能に狂っていた。答えなど待てずに美少女の形のよいヒップを両手で掴んで固定する。我慢などできるはずがない。愛液で濡れる股布に包まれた女肉の重なり合ったブルマ素股に怒張を近づける。

ヌチャ——。

熱い肉汁で内側からビショビショになった布地に亀頭が触れた瞬間、背筋に電流が走ってビクンッと腰が震えた。

「う、うわっ! ブルマが熱いつ……」

今までに味わったこともないような快感で高まる射精感を抑えつけて、にゆるりと粘液

で滑る恥丘に最大級に勃起したペニスをゆつくりと押し込んでいった。

ヌプヌプと湿った音と共に男根が布地の上を滑る。浮かび上がった縦筋を肉棒でなぞられて美女たちも同時に快感に喘いだ。

「あぁっ、あひっ、擦れてるう！ 裕くんのおちんちんで……アンっ！」

「ンんんう……、あ、熱いですわね……」

ブルマの中で蒸れに蒸れた女肉はとても熱い。柔らかい恥丘やビショビショの布地の感触が男根を包み、下半身に落雷を受けたような刺激が走る。

「な、何これ……気持ちよすぎるっ……」

初めて味わう快感に戸惑いながらも、少年は本能的にそろそろと腰を振り始めた。溢れた愛液と先汁が混ざり合い、ペニスが滑りやすくなる。

膣に挿入したわけではなくて一種の素股プレイだとはいえ、童貞少年には快感が強すぎた。温かさと柔らかさに包まれた肉棒は今にも爆発してしまいそうに脈打ち、ドバドバと我慢汁を吐き出しては臙脂色の布地を濡らしていく。

ズチャッ！　ズチャッ！　ズチャズチャッ！！

必死に射精を堪えて腰を振るう少年は女体に覆いかぶさり、押しつぶし合っている巨乳の間に後ろから両手をねじ込んだ。右手で翔子の乳房、左手で美佐の乳房を乱暴に揉みし

「あつ、あつ、つアあん！ 裕くうん、おっぱい揉まないで、いやあ……」

女性器を熱棒で擦られて快感に悶えていた美佐の表情は、さらに快楽に蕩けたものへと変化していった。女教師の乳房は、弾力のある翔子の乳房に潰されてぐにやぐにやと形が崩れている。

「うふふ、先生ったら胸を揉まれて感じてしまったのですわね……」

豊乳を裕貴に愛撫されながら、自分も美佐の乳房をこね回す。

「翔子さんも、気持ちよくなってください……」

まだまだ余裕を感じさせているお嬢様に責めの矛先を集中させることにした。腰を少し沈めて意識的に亀頭で肉土手の上壁、つまり翔子のヴァギナを擦りたてる。そして若さ弾ける瑞々しい巨乳を後ろから両手で驚掴みにしながら顔を体操着の上から背中に押しつけた。

「ひやつ、ああ、くう……は、はっ、あはあん……」

綺麗な金髪が揺れ、翔子も突然の快感の波に上体を仰け反らせた。

「翔子さんっ、翔子さんっ……」

両手の手のひらに広がる巨乳の張りと重み。そして手の甲には爆乳の柔らかさ。バストの頂点で恥ずかしくしこっている突起ごと全体を揉みまくる。背中はずっとりと汗ばみ、ナイロン生地 of 体操着は濡れていた。背中から匂いたつ甘酸っぱい香りを鼻孔いっぱい

吸い込むと、脳髓が蕩けてしまいそうになる。

「あはんっ、ご、ごめんね……お姉ちゃんもうイッちゃいそうなのおっ！」

口の端には唾液の雫を光らせ美佐が喘ぐ。もう我慢できなくなっているのは裕貴も翔子も同じだ。三人の体液が混ざり合った陰部は性器が何度も激しく擦れ合い、太股まで蜜が飛び散っている。

「そのっ、その調子で……ああんっ！ な、何かがキてるっ、キてますわっ！」

金髪少女は全身を駆ける快楽に耐えようと必死に身体をくねらせた。喘ぎ声を我慢できず、大声で肉悦を訴えかける。

そんな少女に愛しさすら感じながら、熱く濡れた恥丘の中にペニスを何度も突き入れて、何度も根元まで引き抜く。

「あ、ぐうっ……出ちゃうっ、我慢できませんっ！」

美女たちも自ら快楽を求め、腰を揺らして男根に秘所を擦りつけてくる。そのため急速に絶頂への階段を駆け上がる結果になろうとも、動き出した腰は止まらない。柔らかい肉丘の感触に加え、上下に一点ずつあるコリッとした硬さがペニスを扱きたてる。

「いいっ、いいのお……お姉ちゃんのオマ○コもつと擦ってえー」

下半身から全身へと広がる甘美な刺激。込み上げてくる絶頂への欲望は堪えきれない所まで高まっていた。

「な、何て気持ちいいのっ！ 裕貴のペニス凄いつ、ペニス気持ちいいッ!!」

もうダメだ。そう思った瞬間に思いつき股間を美女二人の尻肉に叩きつけた。血管を浮かび上がらせている肉棒が今までで一番激しく擦れた。

嵐のような射精感が全身を襲い、ガクガクと身体が震える。反射的に翔子の巨乳を揉んでいた両手にも力が入り、深く十本の指を乳肌に食い込ませた。

「裕くん、お姉ちゃんイクっ！ イっちゃうよおッ!!」

「あ、はっ、ウ、ウソ……これは、何ですのお！ わ、わたく、しい、オッパイが気持ち、気持ちいい、ひああああああ！」

プシュッ！ 男根が陰唇から飛び散った熱い粘液に包まれる。それが合図だった。

「あっ、ああっ、もう我慢できないっ！ で、出る、出る出る出る——ッ！」

どびゅっ！ どびゅびゅぶぶっ！ どびゅっ、どびゅるるるるるるるるっ！

狭い尿道を押し広げて駆け上がるスペルマが膣脂色のブルマの奥で爆発した。亀頭を挟み込んだヌルヌルの股布とヒクつく女性器の感触に、ペニスは何度も脈打って精子を吐き出し続ける。

「きやうっ、裕くんの熱いオチンチンが擦れてえ……ああんっ、も、もう……はああああああああっ！」

素股でこれほどまで気持ちいいものなのだろうか。オナニーなどとは比べ物にならない

快感をじっくりと味わうかのように女肉に埋まったペニスは小刻みに震えている。頭の中は真っ白になり、精液を放つたびに情けなく喘いでしまう。

「あ、あ、あう……温かくて気持ちいいですわあ……」

愛液と汗の混ざったきつい女臭の香る蒸れ蒸れのブルマ。そこに生臭い牡臭がミックスされて更衣室はむせ返るような淫臭が漂う。

女汁で黒く大きなシミの広がっていた臙脂色の布地の間から白濁液が溢れてきて三人の股間をドロドロに汚した。どろりと抜け出てきた男根から、最後の子種が翔子の形のよいヒップを包むブルマへと飛び散る。

「はあああああ……ふう……ブルマ気持ちよすぎるよお……」

凄まじい解放感の後はドッと脱力感が全身を襲う。不意に力が抜けて、汗でべつとりと体操シャツが張りついたお嬢様の背中の上に崩れ落ちた。

「ふあああん……あ、熱いですわ……」

「もう……裕くんったらあ……」

ブルマの上から性器を擦られて達するという変態的な行為にもしっかりと感じてしまった美女二人も腹部を大きく上下させて呼吸を整えながら絶頂の余韻に浸っている。

裕貴はもう少しこの雰囲気を楽しみたくて、翔子に抱きついたまま後ろから乳房を弄り続けた。



みと指先で刺激を与えられて少年は恥ずかしそうに身を振っている。

「ひ、裕貴くん……さっき私の背中に……オ、オチンポ擦りつけてきました」

顔を真っ赤に染めた少女も横から少年の羞恥心を煽り立ててくる。

「擦りつけたんじゃないくて、あれはっ」

まさか清楚なお嬢様である亜理栖の口からチンポなどという言葉が飛び出すとは思ひもしなかった。彼女も恥ずかしがっているが、従姉や初恋相手に勃起を指摘された裕貴の方が何倍も恥ずかしい。

「あらあら、裕貴ったら本当にスケベねえ。私たちの水着姿を見て、オチンチンをこんなにしちゃったの？」

ゆっくりと焦らすように逸物の上を這いずり回る手の感触がもどかしい。もっと強い刺激を求めて股間はジクジクと疼き始める。

「そ、そういうわけじゃ……」

「ウ、ウソついちゃダメだよ。じゃあこの硬くなっているものは何なの？」

普段の亜理栖からは想像もできないような妖艶な表情を見せ、少女も硬くいきり勃つ肉棒に手を伸ばした。ツボを押さえた千里の愛撫とは違ってたどたどしい手つきだが、十分にペニス膨張へと誘う刺激となる。

「いいわ、勃起してるかどうか直に調べてあげるから上がりなさい」

千里はプールの縁を持つと、ザブンと水音を立ててプールサイドに上がった。目の前で豊かな尻肉が踊り、大量の水が彼女の身体中から滴り落ちる。

亜理栖もそれに続き、少年は二人に引きずり上げられるようにして水槽から這い出してきた。すぐさま従姉が馬乗りになり、海パンの腰紐を解く。覆いかぶさる千里の身体からポタポタと水が滴り、少年の胸に落ちる。

「ま、待ってっ、お願いだから二人とも落ち着いてっ」

「さあさあ、勃起していないと言い張るならお姉様たちに裕貴の生オチンチンを見せてみなさい」

抵抗も虚しく海パンはムリヤリ引きずり下ろされ、腰ゴムに引っかかっていた先端が反動で勢いよく鎌首をもたげた。

ブルンッ——!!

包皮を被ったまま勃起した包茎ペニスが恥女と化した二人の視線に晒される。通常の倍以上にサイズは膨れ上がり、赤黒い陰茎には幾筋もの血管を浮かび上がらせていた。

「何よこれは？ ビンビンに勃起してるじゃない」

「うっ……」

千里はニヤリと口元を歪ませて被虐的な笑みを作った。水に濡れてしっとりとしている陰毛の中心でそびえる肉柱を輪にした指先で握り、ゆっくりと上下に扱いて先端の薄皮を

引きはがす。色素の薄いピンク色をした亀頭は刺激に慣れておらず、空気に触れただけでビクビクと脈打つ。

「裕貴くん、エッチだよ……」

四つん這いになって近づいてきた少女が叱るようにメツと羞恥に眉をひそめる。仰向けに寝かされた少年の目線の先には濡れたスク水に包まれた美乳。そして足には湿った尻肌と太股の生温かい感触がさらに甘い刺激となり脳髓に溶け込んでくる。

「このチンポで美佐姉えとセックスしたの？」

「美佐姉えとはしてないよっ！」

確かにもう一人の従姉とも素股プレイは経験済みだが、セックスはしていない。

「へえ、美佐姉えとは・してないのね？」

「それはその……」

ハメられた。誘導尋問に引っかかって、墓穴を掘ってしまったことに気づいた時にはもう遅かった。ある意味感心したという風に頷く千里とは反対に、ブラウンヘアの少女は耳まで赤く染めながら少年に詰め寄る。

「まさか翔子さんと、セ、セックスしたの……？」

「さて、大人しく全部吐いてもらおうかしらね」

もはやどう足掻いても言い逃れできない状況に追い込まれてしまい、少年は翔子との初

体験について二人に説明するハメになってしまう。

美佐をも巻き込んだ素股3Pセックスの件は伏せておいたが、金髪お嬢様との性行為については根掘り葉掘り聞かれて一つ一つ答えさせられた。巨乳を夢中になって揉んだことやフェラチオをしてもらったこと、正常位で女肉を貪ったこと。

「なるほどね、あの高飛車な翔子がフェラまでするなんて……よっぽど裕貴のことが気に入ったのね……」

少年の話を聞き終わると、女教師はうーんと首を捻った。彼女の思っていた以上に従弟とバレー部の部長の仲は進んでいるらしい。亜理栖は膝について座ったまま愕然とした表情で固まっている。

「でもね、裕貴……」

ワインレッドの瞳に妖しい光が色を成す。

「あんな小娘とのセックスなんてすぐにお姉様が忘れさせてあげるわよ」

「えっ、千里姉さんっ？ な、何をするの……」

千里は少年の身体から降りると、左右から巨大な乳房を両手で中央に搾り寄せる。

「ほら、亜理栖もしなさい」

顧問の声を聞いた少女も向かい側にポジションを取った。巨乳と美乳が限界まで勃起男根を挟んで向かい合い、ゆっくりと近づいてくる。水を大量に吸い込んだ濃紺のスク水は

女体にピッタリと張りつき、乳房の頂点で突き出したポッチを浮かび上がらせていた。だんだんと迫ってくる肉塊に少年は心を躍らせ、わずかに存在していた不安が期待一色へと塗り替えられる。

「あうっ——！」

まず千里の両腕に抱えられた肉乳の谷間にペニスが挟み込まれ、続けて亜理栖の美乳がそれを押し戻すように密着してきた。経験したことのない柔らかさに股間を包まれ、少年は快感のあまりに低い呻き声を上げる。

「うふふ……どうやら翔子にはパイズリはしてもらってないみたいだね。どうかしら私たちのオッパイの感触は？」

水の冷たさの奥からじんわりと彼女たちの体温が乳房を通して伝わってくる。大きさに違いはあるものの、どちらも形容し難い快感を与えてくれた。柔らかさと張りのどちらも兼ね備えた美人教師のバストと、形のよさと弾力で勝る少女のバストがぶつかり合っているやりと押しつぶされてへしゃげる。千里は慣れた手つきで男根を責め立てるが、亜理栖は懸命に乳房を牡棒に押しつけようと四苦八苦していた。

合計四個の乳房はペニスをむにむにと挟んだり、上下左右に扱きたてたりして少年を肉体的にも視覚的にも興奮を誘う。フェラとも膣肉とも異なる独特の快感が背筋を走り脳髓に快楽信号を伝える。

「んんっ……うふ、はぁん……あまり滑りがよくないわね……」

「ひ、裕貴くん……き、気持ちいい……?」

水着の生地の下からピンピンにしこり勃った乳頭同士が擦れて、二人の吐息が色を帯びて熱っぽいものへと変化していく。

「こうすれば……ん、んれろお……」

かすかに頬を上気させた千里が口から舌を出して唾液を滴らせ落とした。一筋の透明な液体がトロリとパイズリをしている巨乳とペニスの間に流れ落ちる。それを見た亜理栖も羞恥に美貌を染めながらも教師に倣って小さな口をいっぱい広げ、チロリと舌を突き出して摩擦部に唾液を垂らした。

スク水の生地にプールの水と唾が染み込み、乳奉仕の潤滑が格段によくなる。味をしめた二人は次々に自分たちの胸元を汚していった。ペニスが擦れ合えば擦れ合うほどにズチャズチャと白く泡立ちドロドロになったスク水オッパイ。激しい乳圧と繊維の感触が若い男根に絡みついて、否応無しに官能を引きずり出されてしまう。理性を保とうとしても、意識よりもずっと深い所が肉欲に反応して疼き始める。

先端からは透明な粘液が溢れて肉傘から竿へと零れ落ち、乳房に掬い取られて乳摩擦に新たな感触が加わった。

（うぁうっ……オッパイがあ、オッパイが気持ちいいっ!）

美人教師は自分の豊満なバストを揉み廻りながら優等生のバストに押しつけ、唾液でぬめるスク水を擦り上げた。サイズ差から押されがちになっている亜理栖も、負けじとグイグイ胸を揺すって抵抗する。

「あふう……ち、千里さんの、オッパイが擦れてますう……」

「そうよ、いい感じよぉ、その調子で裕貴を……気持ちよくさせてあげるのよ」

美乳と巨乳の隙間からわずかに覗く亀頭は、凄まじい乳圧に扱き上げられて苦しそうに先端から我慢汁を漏らして喘いでいる。

「はぁあうっ！ すごっ……き、気持ちいいー」

二人の唾液に先汁まで混ざり込んで、にちゅにちゅと淫猥な粘着音を奏でながら肉勃起を責めるパイズリ奉仕は続く。教師と生徒も濃紺の布地に浮かび上がるほどに尖り勃ったお互いの乳首を擦りつけ合い、頬を淫らに上気させながら快感に酔いしれていた。

「ああ、はぁう……先っちょから何か出てきたよぉ？」

粘度の高い体液を塗り込まれてぬめぬめと照り返るスク水に包まれた乳房を、熱く勃起したペニスに押しつけながら亜理栖もうっとりとした表情を浮かべる。

自分の股間を乳房で挟み込んで熱心に乳奉仕を行う二人の横顔が、牡としての本能をくすぐる。執拗に欲望を刺激された少年は、いつの間にかさらなる乳快楽を求めて自ら腰を振り始めていた。



(すごいっ！ す、凄いっ！ 気持ちよすぎるっ！)

目下では翔子が一人必死にブルマの上からクラスメイトの蒸れた股間に舌奉仕を続けていた。快感で反りかえる背中の下では四つん這いになって垂れ下がった巨乳が、悩ましくゆさゆさと揺れている。生乳を露出させた左の乳房と布地に覆われた右の乳房がそれぞれ踊ってぶつかり合う。

「んぐっ……ふあ、はああ……美佐姉え、こっち向いて」

「うんっ……裕くん、好き……あふう、ちゅっ、ちゅむう……」

裕貴はキスの相手を横から抱きついて母性的な従姉に絞った。右手の指をペニスのように彼女の蜜壺の中をかきむしる。反対の手でお餅のような豊乳を揉み回して、頂点のピンク色をした尖りを指で弄り責めた。

「ほら、亜理栖もお返しに翔子のオッパイを揉んであげなさい……」

茶髪の少女は教師の言葉に、とろんと揺るんだ表情を浮かべながら頷いた。腰を少しかがめて十代とは思えないクラスメイトの巨乳を両手で持ち上げ、たぶたと揺する。

「はあっ、ンああっ！ ダメえ、バストを弄ったらダメですわっ！」

翔子は汗でキラキラと輝く金髪を振り乱しながら、乳悦に悶えてあられもない嬌声を上げていた。乳肉を揉まれて少女の快感も高まったのか、膣内の締めつけが急に激しくなる。「うっ、くあああっ！ そんなに締めつけたらイっちゃうよおっ！」

ムチムチと触れるヒップの奥では、蠢く肉ヒダが収縮を繰り返してペニスを締め上げてきた。絶頂に近いことを感じると、自然と腰の動きが速くなっていく。本能のままに猛り狂う高速ピストンが食欲に膺壁をえぐった。蜜壺の中で跳ね踊る肉勃起は先端からダラダラと先汁を滴らせて脈動する。

「先生もお……先生も気持ちよくなってくださいっ」

生徒たちの痴態を覗き込もうとして身体的位置をずらしたセクシー教師に女生徒の手が伸びる。

「えっ……こ、こらっ！ 何するのよ、亜理栖っ!？」

体操着は捲り上げて上乳に引っかけたまままで露出した乳房と、先ほどのクンニ絶頂のせいでぐしょ濡れになったブルマの股布を弄られて慌てて身を振る。

「私、一生懸命がんばります……ほら、気持ちいいですか？」

今まで一人余裕の表情で乱交を眺めていた千里の顔に朱が差した。まさか大人しい亜理栖から愛撫を受け、その上感じてしまうなど思ってもみなかったのだろう。しかし顔にはすぐに痴女の笑みを浮かべ、懸命に自分へ愛撫を続ける教え子を見つめていた。

「はぁ、あふう……ふふ、いいわよ、その調子よお……」

頬を羞恥に赤らめる亜理栖と妖艶な色に染める千里はお互いの乳房を揉み合いながら、快感を高めていく。美女と美少女が快楽を貪っている姿は、それだけでも一つの絵画のよ

うに淫らで美しい。

（あぁっ！　が、我慢できないいいっ！）

視覚でも聴覚でも五感全てでセックスを味わっている。もはや絶頂を求めて上り詰めることしか少年の頭には存在していなかった。

「きやうっ！　裕くんの指が、激しいよおっ！」

指を差し込んだ女陰からは白く泡立った粘液が手首まで垂れ落ちてくる。絶頂寸前でビクビクと痙攣を繰り返す膈壁は強烈に少年の指先を締めつけた。

「んぐっ！　ちゅむう……ひい、ひやぁっん！　そんなに擦ったらお姉ちゃんイっちゃうよおっ！」

キスは舌の絡み合いを激化させ、大粒の涎が零れ落ちるのにもお構いなしだ。荒々しい手つきで乳房を揉みあげることもコツを掴んでいる。指と手と口で責め立てられた美佐は甲高い悲鳴を上げた。

「あふっ、ああぁっ！　ひ、裕貴のペニスが、お腹に当たって気持ちよすぎますわぁっ！」
汗でべつとりと尻肌に張りついたブルマが扇情的に揺れる。金髪お嬢様の子宮から脳髓までを勃起男根が貫き、女体を快楽で躍らせた。

「んはっ、ああ、あふうんっ！　ほらほらっ、亜理栖もイっちゃいなさいっ！」
少女に抱きついて乳房を揉み回す千里の手の動きにも力が入る。

「いやっ、き、気持ちいいっ！ 翔子さんにオマ○コ舐められちゃってえっ、恥ずかしいのに気持ちいいのおっ！」

ズンズンと犬のようにバックから犯されている翔子が激しい抽送につんのめって亜理栖の股間に思いつき顔を突っ込んだ。ブルマの奥で勃起しているクリトリスに金髪少女の歯が当たり、優等生を絶頂へと追い詰める。自分が感じれば感じるだけ教師にも気持ちよくなって欲しいと思っているのか、いつそう千里への愛撫も激しくなっていた。

「いいっ、あぁっ！ 亜理栖の指が気持ちよくて、イっちゃいそうよっ！」

亜理栖の指を深く咥え込んだ紅髪ロングの教師も、快感に悶えて絶頂直前の身体を波打たせた。陰唇の間からトロトロと蜜を溢れさせ、完全に包皮は剥け上がって肉芽がしこり勃っている。敏感になった女性器を指先で掻き回され、陰豆を指の腹が擦りたてられた千里はさらに快感を求めて優等生に腰を押しつけていた。教師と生徒が淫らに絡み合っ

て絶頂を乞う姿が少年の目を楽しませ、性的興奮をさらに沸き立たせる。

「しょ、翔子さんの膣内、狭くてうねって、気持ちいいっ！ うあぁっ、出るうっ！」

興奮のままに腰を振り出した瞬間に、ペニスが肉で扱き上げられる快楽が少年の下半身を貫いた。分泌液でグショ濡れになった股布を寄せての挿入は、剥き出しの女陰にペニスを突き立てる以上に興奮を沸き上がらせて掻き立てる。膣肉が幾重にもなり波打って、金髪の縦ロールが大きく揺れる。荒々しい勃起ピストンを受けて、プシュッという音を鳴ら

して白濁した粘液が潮を噴いた。

「も、もおつ、ダメえっ！ イクイクッ、いつてしまいますのおおおっ！ ああつ、ひいあああああああああつ！」

一番激しく責め立てられている翔子が腰から仰け反り甲高い悲鳴を上げた。

「いやいやいやあああつあああああつ！ 恥ずかしいのに、気持ちいいのおおおおお！」

口から涎を垂らして絶頂に喘ぎながらも必死に舌と唇を動かして、亜理栖の秘所を舐めしやぶった。ブルマの上からとはいえ勃起した肉芽を責め立てられてはたまらないだろう。

「んはあつ！ 亜理栖の指すごいわ、すごいのおっ！ はああああひいいんっ！」

千里も額に汗を滲ませて教え子の愛撫に身体を強張らせる。ピュッピュッと潮を噴きながら全身を痙攣させた。幼馴染も教師もお互いの身体を弄り合いながらアクメに達する。

「んっ！ んああつ！ ちゅぱっ……お、お姉ちゃんもイっちゃううううううっ！」

ふしやああ——。新たな愛液を漏らしながらビクビクと身体を痙攣させた。裕貴は美佐のコリコリとしたクリトリスを乱暴に指の腹で擦って肉壺の奥を指先でえぐる。接吻をしている唇は吸いすぎたためか赤く腫れて、溶け合うように絡まった軟体物が彼女の舌と快楽を引きずり出した。

「うあああああつああッ！ 出る出る出る出るうっ！ あつ、ああつ、出るううううッ！」
股間に熱い蜜液を浴びながら腰を猛然と振るい、子宮口に亀頭を突き立てた瞬間に限界



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>